みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Culture and Variety of Forms of the Thumb Piano played by the Tshokwe in Northeastern Angola (Feature Articles 2 : Aspects of African Popular Music)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005864

特集２：アフリカン・ポップスの諸相

[研究ノート] アンゴラ北東部におけるチョクウェの「親指ピアノ」の多様性と生活世界

国立民族学博物館　池　谷　和　信

「親指ピアノ」は，アフリカで生まれ，現在でもサハラ以南のアフリカ各地に広くみられる楽器である。本稿では，アンゴラ北東部に暮らすチョクウェの音文化のなかで「親指ピアノ」に焦点をおいて，その楽器の形態やそこから演奏される曲の歌詞を分析することから，チョクウェの音文化と生活とのかかわりあいを把握する。調査は，アンゴラ北東部のドゥンド町内や近郊に住む９人の演奏者を対象にして，聞き取り調査や演奏曲を録音する作業をおこなった。

チョクウェは，アンゴラ東部を中心にして居住するバンツー系の人々である。彼らは，キャッサバ栽培などの農耕を中心として，狩猟，漁労，出稼ぎなどを複合させた生業を営んでいる。まずこの地域では，各々の形態の違いに応じて独自の名称を持つ８種類の「親指ピアノ」を確認できた。また，収集された43曲は，男性によって単独で演奏されるのもので，すべての曲に歌詞がついていた。このうち31曲の歌詞の内容を分析すると，経済生活，男女関係や親子関係，日常生活，出来事，割礼儀礼，植民地時代の歴史などに分類される。さらに，1960年代の報告と現在のものとを比較すると，「親指ピアノ」は，娯楽としては使われている点では共通しているものの儀礼の際には用いられなくなっていた。本稿ではこの楽器の機能として，歌詞のなかに登場していた様々な出来事が次の世代に伝承されていくことから，当時の生活世界が反映された個人史が伝承される点に注目している。

１．はじめに

（１）研究史，目的，方法

「親指ピアノ」は，アフリカで生まれ，現在でもサハラ以南のアフリカ各地に広くみられる楽器である（Kubik，1998）。筆者は，この楽器に焦点をおいて，それがアフリカ各地に拡散していった歴史，人々の生活のなかでの音楽の役割を把握することを問題意識としてもっている。すでに筆者は，アフリカ全体の「親指ピアノ」の形態分類とその発達プロセスについて報告している（池谷，2000）。また，現代アフリカにおいてその楽器を使うミュージシャンがどのように生まれているのか，ドイツのエキスポ2000での彼らの活動をとおして明らかにしている（池谷，2001）。

さて，本稿で対象とするチョクウェ（Tshokwe）の「親指ピアノ」は，鉄製と木製のキーの両者が併用されていること，数種類のタイプのものが知られていること，鍵盤に幾何学模様が付与されることなどから，アフリカ全体のなかで特異な存在である。すでにチョクウェの「親指ピアノ」の研究は，現在の内戦が開始される前のポルトガル植民地アンゴラの時代に，民族音楽に関する共同調査の一部として実施されている。

この調査に参加したバスティン（Bastin）は，チョクウェの「親指ピアノ」を簡単に紹介すると同時に，彼らの伝統的音楽に関して楽器，歌，ダンスの３点からまとめている（Bastin，1961，1992）。また，現在の北ルンダ州ドゥンド西部のロブア（Lovua）地区とドゥンド南部のカミソンボ（Camissombo）地区での網羅的な事例研究が報告されている（Diamang，1961，1967）。

その一方で，Redinha（1984：145-147）は，アンゴラ全体の楽器を概観するなかでチョクウェやルエナの「親指ピアノ」にもふれている。ここでは，“キサンジ”（quissanje）という総称が使われているほか，“ムタパタ”（mutxapata），“ムエンバ”（muiemba）のみが記載されて

2001年12月28日受理
連絡先：〒565-8511　吹田市千里万博公園10-1
e-mail：ikeya@idc.minpaku.ac.jp

いる。

その後Borel（1986：56-107）は，アフリカの「親指ピアノ」を概説するなかでアンゴラの国内に散在していたチョクウェのチタンジ（tshitanzi）を簡単に紹介している。しかし，体系的な分類への言及はない。さらに，Kubik（1998）は，アフリカの「親指ピアノ」の歴史を概括してベルリンの民族学博物館所蔵の「親指ピアノ」を紹介すると同時に，1965年のチョクウェ社会での現地調査からその楽器の製作工程や音階などの報告をしている。

以上のように研究史をふりかえってみると，チョクウェの「親指ピアノ」の多様性がばらばらに記述されてきたこと，「親指ピアノ」と彼らの生活との関係が十分に明らかにされたわけではないこと，1975年11月にポルトガルから独立して以降現在までの約25年間，チョクウェ社会での現地調査がまったく実施されていないことがわかる。この点では，2001年の現地調査の成果と1960年代のものとを比較することで，音文化の歴史的変化を把握することもできるであろう。

本研究では，チョクウェの音文化のなかで「親指ピアノ」に焦点をおいて，その形態やそこから演奏される曲をとおして，チョクウェの音文化と生活とのかかわりあいを把握することを目的とする。あわせて，既存の文献を利用することで1960年代から現在までの約30年以上におよぶ歴史的な変化を明らかにする。

筆者は，2001年1月中旬から2月上旬にかけて，アンゴラ北東部のドゥンド（Dundo）町内や近郊に住む9人の演奏者を対象にして，聞き取り調査や演奏曲を録音する作業をおこなった。また，アンゴラ全体における「親指ピアノ」の動向は首都ルアンダ（Luanda）にある国立人類学博物館において，チョクウェの親指ピアノのタイプ分類に関してはドゥンド博物館において，それぞれ収蔵品の調査を実施した[1)]。

（2）調査地の概観

チョクウェは，アンゴラ東部を中心にして，ザンビア西部のザンベジ川上流域やコンゴ民主共和国の南西部のカサイ川上流域にも居住するバンツー系の人々である。彼らは，キャッサバ栽培などの農耕を中心として，狩猟，漁労，出稼ぎなどの生業複合を営んでいる。また，彼らの製作する仮面やいすなどは，アフリカン・アートの傑作として，欧米の博物館ではよく知られている。

本稿の調査地は，首都ルアンダから北東に900㎞の地点に位置する北ルンダ州ドゥンド近郊である（図1）。現在のアンゴラでは，UNITA（アンゴラ全面独立民族同盟）とMPLA（アンゴラ解放人民運動）との内戦がつづいており，国内の陸路はほとんど使用されていない。大部分の物資は，首都ルアンダからUNITAに支配されていない地域へ飛行機で運搬される[2)]。1998年頃には，UNITAの支配地域が広く現地調査は不可能であったが，現在ではいくらか治安がよくなっているといわれる。北ルンダ州の民族構成では，チョクウェが多数を占めるが，ルンダ，マタバ，キコング，ルバ，ルエナなどの多民族が共存する状況になっている。

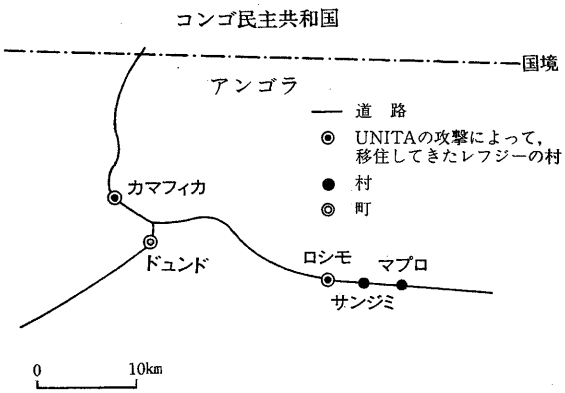

図1　調査地の位置

筆者は，車を借りて，ドゥンドの中心地から20㎞離れた村までのあいだを調査範囲として設定した。ドゥンドからの距離でいえば，カマフィカ村は2㎞，ロシモ村は13㎞，サンジミ村[3)]は16㎞，マプロ村は20㎞離れた地点に位置する（図1）。このなかで，カマフィカ村とロシモ村は，それぞれ1998年に生まれた難民キャンプである。カマフィカ村では，UNITAの攻撃をうけて，ドゥンドから数十㎞離れた北ルンダ州クイロ地区カベンバ村やカエンゲ村からここに移動してきた人が多い。このように，この地域は政府側のMPLAの勢力範囲であったのであるが，1998年にUNITAの勢力が拡大するにともない，村を離れてドゥンド近郊に難民キャンプをつくる人が多い[4)]。

調査地では，1998年におけるUNITAの攻撃の影響がみられ，UNITAの集団によって村が襲われたために，村に楽器を残したままになっている人もいる。また，上述の村では，キャッサバの農耕を中心にして，出稼ぎ，木炭製造などの就業で現金を入手している点では共通している。

2．アンゴラの諸民族とチョクウェの「親指ピアノ」

（1）国内での「親指ピアノ」の分布

図2は，1960年代の現地調査によって作成されたアン

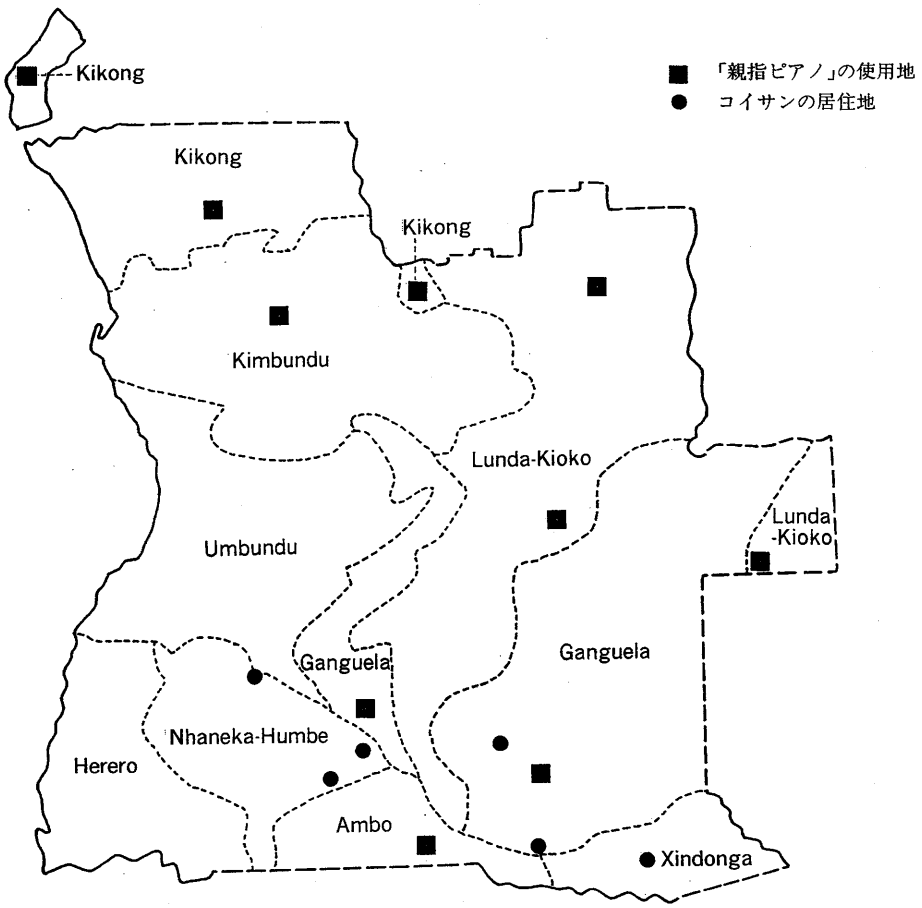

図2　アンゴラにおける民族分布は「親指ピアノ」の分布
Kiokoはチョクウェを示す。出所：筆者作成。民族分布は，(Redinha, 1974) による。

ゴラの主な民族集団の分布を示している。アンゴラ国内には，数十の民族集団が知られている。それらは，バンツー系農耕民や牧畜民が大部分を占めており，コイサン系のサン（ブッシュキーマン）がほんの一部を占める。

図2は，アンゴラにおける「親指ピアノ」の分布を示す。この楽器は，国内で広く“キサンジ”(txissanje) と呼ばれている点では共通する。これらのなかで，「親指ピアノ」を使う民族集団は，南西部を除いて国内全体に広がっている。具体的には，クン・サン (Kubik, 1970)，ガングエラ（ルアンダの国立人類学博物館の展示品），アンボ，チョクウェ (Bastin, 1992)，ルウェナ，キコング，キンブンドゥーなどである。また，国の南西部や南東部に暮らすオンブンドゥー，ヘレロ，シンドンガなどでのこの楽器の使用は確認されていない（図2）。

以上のような分布が何を意味するのかは明らかではない。しかし，筆者は，この楽器の伝播ルートを考える上でいくつかの示唆があるとみている。つまり，アンゴラに隣接するコンゴルート，ザンビアルート，ナミビアルートの3本の流れを想定できるが，このうち前二者のルートは重要である。もともとチョクウェは，コンゴ南部からアンゴラに移住してきたことを考慮すると，この楽器の伝播ルートを推定する際にコンゴルートへの考慮が必要であると思われる。

(2) チョクウェの「親指ピアノ」の分類

チョクウェは，「親指ピアノ」を“キサンジ”という総称で呼ぶほかに，タイプの違いに応じて独自の名称をつけている（図3）。1958年の研究では，“カコロンドンド”(cacolondondo)，“ムエンバ”(muiemba)，“リケンベ”(rhiquembe)，“サッソ”(sasso) の4分類がなされている (Oliveira, 1958: 38)。また，1961年の研究では，“カコロンドンド”(kakolondondo)，“ムエンバ”(muyemba)，“リ

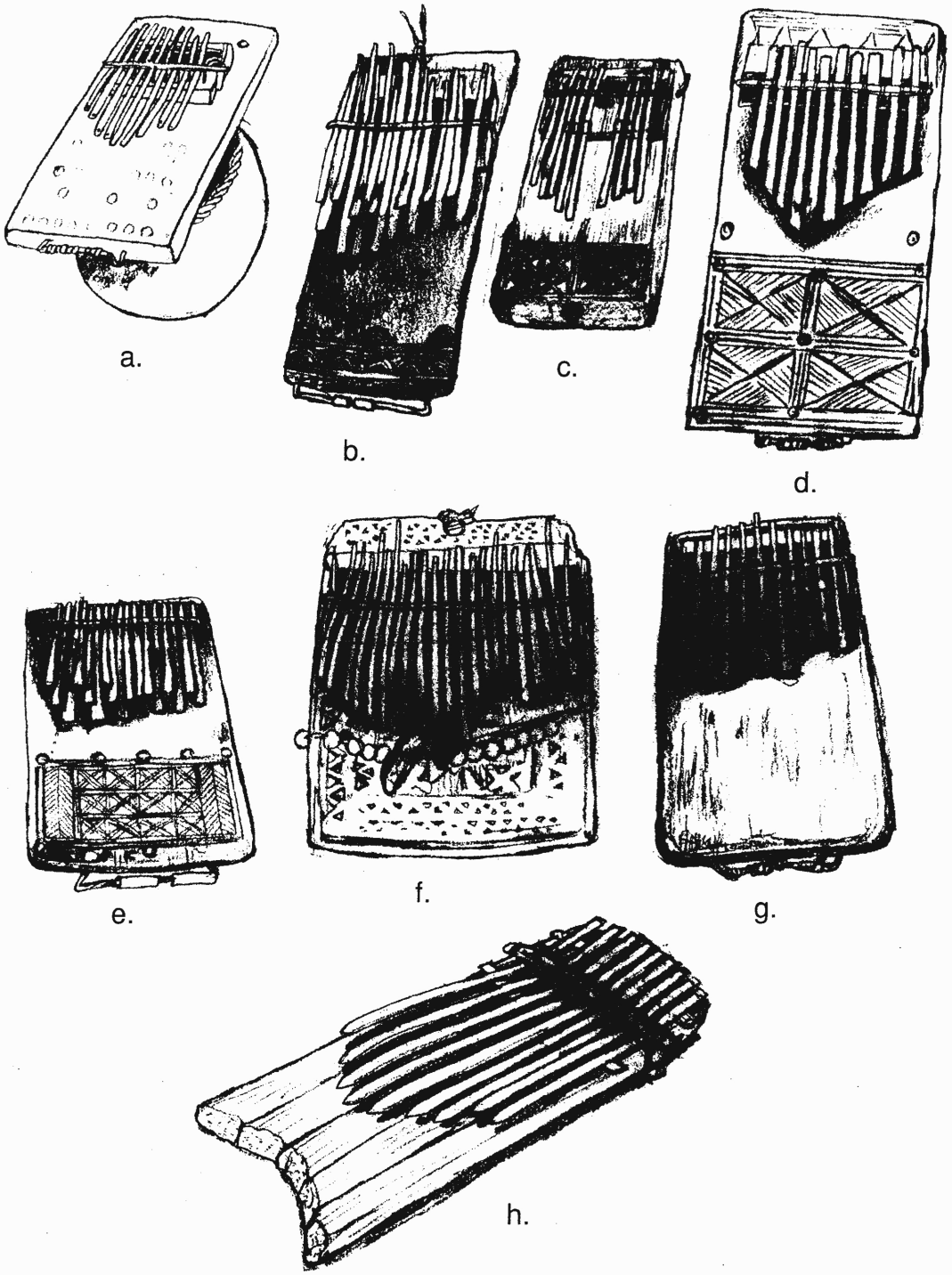

図3　チョクウェの「親指ピアノ」（“キサンジ”）の分類
a. “カコロンドンド”　b. “ムエンバ”　c. “リケンベ”　d. “サッソ”
e. “ルンガンドゥー”　f. “ムカパタ”　g. “ムタタ”　h. “キサンジチャケレ”
（出所）ドゥンド博物館の収蔵品への聞き取り，および現地での観察から作成。

プング”(lipungu),“ルンガンドゥー”(lungandu),“ムカパタ”(mucapata)の5分類がなされている(Bastin, 1961;Bastin, 1992：24)。このなかで前者3つは,1958年の報告と共通するものであるが新たな2者が加えられた。

しかし,本稿では,従来のタイプである“カコロンドンド”,“ムエンバ”,“リケンベ”,“サッソ”,“ルンガンデュー”,“ムカパタ”の6タイプを確認すると同時に“ムタタ”(mutata)を新たに加えて7分類が明らかにされた(図3)。さらに,これらに,鉄ではなくパームの木(ラフィア)を素材とする“キサンジチャケレ”が加えられる。以下,キーの配列,共鳴具,さわりの3点から各タイプの特徴を記述する。

キーの配列パターンは多様である(図3)。“ムエンバ”と“ルンガンデュー”は,キーの列が2段に並んでいる点で共通しているが,その他のものは1段である。“ムカパタ”のキーの素材には鉄製と木製とがあり,そのキーの総数は18－23本で最も数が大きい。“ムタタ”は,9本のキーが1段に並び,キーとキーの間にすきまがみられる点に特徴がある。

共鳴具には有無がみられる。“カコロンドンド”には共鳴用のヒョウタン製の容器がつけられることが多く,“リケンベ”の共鳴具は箱型になっている。これら以外のものは,必ずしも共鳴具がともなうとは限らない。

さわりは,とりつける場所の違いで3タイプに分かれる。鍵盤の端のものは,“カコロンドンド”,“ムエンバ”,“サッソ”,“ルンガンデュー”,“ムタタ”の5種類,鍵盤の上のものは“ムカパタ”,キーにまきつけるものは“リケンベ”と“ムタタ”である(図3参照)。

なお,“キサンジチャケレ”は,鍵盤とキーともがパームの木(txakele)からつくられ,子供によって利用されるという特徴をもつ。

3．チョクウェの生活と「親指ピアノ」

チョクエの生活のなかで「親指ピアノ」の音楽は,どのように関わっているのかを把握する。ここでは,演奏者の特性,演奏される曲の歌詞の内容,通過儀礼とのかかわりという3点からみていく。

(1)演奏者の特性

すべての演奏者は,チョクウェの男性である(表1の①～⑨)。年齢は,10歳代(演奏者⑥)から70歳代(演奏者①)とばらつきがみられる(表1)。彼らは,カマフィカ村に3人,マプロ村に2人,ロシモ村に1人,その他の人はドゥンドに居住する(図1を参照)。これは,各々の村単位でみると,1－3人の演奏者がいるにすぎないことを示している。

また,多くの演奏者が,“リケンベ”を使う点では共通するが,“カコロンドンド”を組み合わせる人がいる(演

表1 「親指ピアノ」演奏者の特性

演奏者名	(出生年)	民族集団	居住地	タイプ	曲数	楽器の製作	楽器の所有	習得方法
① L.F.	(1924)	チョクウェ	ドゥンド	a.c.	8	不可	有	友人から伝授
② J.C.	(1950)	チョクウェ	カマフィカ	a.c.	11	不可	無	友人から伝授
③ A.M.	(1938)	チョクウェ	ドゥンド	a.b.c.f.g.	23	不明	有	父から伝授
④ L.M.	(1940)	チョクウェ	カマフィカ	c.	7	可	無	不明
⑤ M.J.	(1953)	チョクウェ	カマフィカ	c.	6	可	有	いとこから伝授
⑥ T.H.	(1984)	チョクウェ	マプロ	a.c.h.	9	可	有	祖父から伝授
⑦ J.P.	(1947)	チョクウェ	マプロ	c.	2	不可	無	村の年長者から伝授
⑧ J.B.	(1947)	チョクウェ	ロシモ	c.	4	不可	無	友人から伝授
⑨ N.M.	(1972)	チョクウェ	ドゥンド	c.	3	可	有	祖父から伝授

(注) a.“カコロンドンド” b.“ムエンバ” c.“リケンベ” d.“サッソ” e.“ルンガンドゥー” f.“ムカパタ” g.“ムタタ” h.“キサンジチャケレ” 筆者の聞き取り調査により作成。

奏者①②③⑥)。一人のみ，5種類（“カコロンドンド”で6曲，“ムエンバ”で3曲，“ムカパタ”で3曲，“リケンベ”で6曲，“ムタタ”で5曲）の楽器を演奏できることを確認した。これらから，前節で述べた“ルンガンドゥー”の楽器を演奏できる人は存在しないことがわかる。

一人当たりの曲数では，歌詞付きの曲で2－23曲を示す（表1）。これらは，演奏者自らが作詞・作曲したものではなく祖父やいとこや友人から伝授されたものである。ちなみに，各演奏者によって，その歌詞内容に重複はなく異なっている。

さらに，演奏者が楽器の製作者や所有者であるとは限らない。村のなかで楽器の貸し借りは普通にみられる。演奏の際には，両手の親指を使うのが普通であるが，人差し指が演奏に使われることもある（演奏者⑤の場合)。

（2）歌詞内容の分類

調査地において「親指ピアノ」の演奏を聞いていると，歌が中心で，曲はバックを流れる伴奏のようにみえる。また，この楽器によって演奏される曲には，曲名はないが必ず歌詞がついているのが特徴である。筆者は，各々の曲を対象にして曲の内容がわかるようにチョクウェ語の歌詞の一部をとりだした。ここでは，現地で採集した43曲のなかから31曲に限定して，歌詞の内容を分類する。(　　)内は，演奏者名を示している（表1参照)。

1）狩猟活動

TCHIBINDA（演奏者①）猟師。

KUFATXA KATENDE（演奏者①）捕獲の難しい小さな鳥。

NGOLONGO FUCACOMESO TUTETE（演奏者⑤）猟に出かけた2人の男。

2人の男が猟に出かけて1頭のアンテロープを捕獲した。その際に，2人は獲物の分配について話し合った。男は，「獲物の肉を分けるので眼を閉じて下さい」と言った。他の男は，「この獲物を2人で捕獲したので私は眼を閉じることはできない。それでも，あなたは，私にどうして眼を閉じさせたいの」と言った。

チョクウェの経済の中心は農耕であるが，農耕に関する歌詞は3）のなかにあるキャッサバの加工を除いてひとつもなかった。経済生活では，農耕のつぎに重要であったといわれる狩猟活動[5]に関わる話題が選ばれている。

2）男女関係や親子関係

NAYIHUNGA MUTONDO WAMI（演奏者①）私の好きな女性。

NHARI PHE KVOCO NGU KWATE（演奏者③）後ろを向きなさい。そして，私の乳房をつかみなさい。

MARIANA BUNGEYA YANGOGELE（演奏者④）ある夫婦が離婚したあとに，男性は妻であったマリアナのことを思っている。

TUIYA KOCO LUNGA MACUMBATA MAMBA YICA（演奏者⑤）男性が女性をくどく歌。男性は，性交渉を目的として，既婚の女性の家へ行ったが，女性に夫がいるからと拒絶された。しかし，男性は，お金を与えて女性をくどいた。

MAMA CULI ANAI（演奏者②）母は，どこにいるの。

ZOLO MOHINA（演奏者⑨）母は，あなたと話したいために，身をととのえている。

この範疇では，恋愛をめぐる男女関係，母子関係が中心のテーマとして選ばれているが，友人関係のものはみられない。

3）村での日常生活

YIYA WATUA NHI UFUCU（演奏者①）夜，誰が，キャッサバをうすでついているのか？

TANGUA LINO MULIYA（演奏者①）太陽が沈む。

CHOFER MUQUE KOKA CAMIAO（演奏者⑧）ムクウェ氏が，トラックですばやく移動する。

MUYA HE UE MUYA UAKATA ZALILO（演奏者⑥）このベルトは，ズボンにうまくあっている。

ここでは，ズボンのような衣装，トラックのような輸送手段から，村の日常が大きく変化してきたことがうかがえる。

4）村での教え

SANA KOMESO UBEME（演奏者③）美しくなるように，顔を洗いなさい。

NTUHUA KASHI KURIA（演奏者⑤）NTUHUAという鳥は食べられない。

MAMA KADONDOLO MAJI KUMAUEMA（演奏者⑥）ネズミの一種（KADONDOLO）を蒸し焼きにしないならば，食べるのはよくない。

ここでは，歌詞のなかに食物禁忌のような教えが含まれていて興味深い。

5）出来事

MUATXISENGE YAYA MUACHIAVA CALUNZA（演奏者①）マチャンゲ氏とマチャバ氏とのライバル関係の歌。

KUTXINALINGUIE MUJIMO LHA KUSEMUKA（演奏者②）家族から飛び出していった男。この歌は，男性が家族を捨てたあとに，自分が間違っていたことを思い返している。

MAMA WA NGONGEL WANURE（演奏者②）私の母は，私が子供のときにウソをついた。

WALIKONECA NGULO（演奏者②）男が畑へ行って，村に帰ったら，ブタ（NGULO）[6] が死んでいた。

TUEYA KUTXIHUNDA JITA YA HETA（演奏者③）村が攻撃されたので，村にもどれ。通信ドラムで隣人と連絡している。

SABILILA TATA HEZA（演奏者③）男が妻や子を置いて旅に出て，突然に帰ってきた。

SATCHOMBO TCHINI WAMURIA（演奏者④）サチョンボ氏は，ハチに殺された。

LU NOCA WANGURIA MWANE（演奏者④）息子が，毒ヘビにかまれて死亡した。

CUFA TXA KATENDE SONHI YA MUKUATA（演奏者⑤）2人の男の歌。カテンデとカルンバという2人の男がいた。カテンデは村のチーフ（Soba）で，カルンバはチーフの代役をしていた。あるときカテンデが死んだ際に，カルンバは彼の葬式には参加しないで，残念に思い他の村に移動してしまった。

HAYI MAMA DOMINGO WUFA DOMINGO WA CASADA WA TOKESSA N'GOMOE（演奏者⑤）ドミンゴの歌。ドミンゴと呼ばれている男が，日曜日に結婚したが，結婚式のあとに死んでしまった。

MUTAMBULENO NDVUMBA YA MUKUATA（演奏者⑦）ムタンブレノ氏は，ライオンに食べられた。

ENE ALINHI MATVUBU MARUAMA MUIYITUAMO（演奏者④）男が家庭を失った。

TSHINIENGO（演奏者⑨）兄弟が旅に出て，旅先で死亡したことをあわれむ。

これらから，人がハチやヘビやライオンに殺されたこと，ブタが死んだことなどの野生動物や家畜に関係するものと，家族のなかでの男性に関することに二分される。

6）村での儀礼や信仰

MAMA MUANAM MUANAMI TANGUA LHATXA（演奏者②）息子よ。新しい日となった。割礼儀礼を恐れてはいけない。

MUANAMI YACUE CANDA WIVA WOMA（演奏者②）割礼儀礼を恐れてはいけない。

NGOMBO（演奏者②）占い師の歌。

SAPHAMBO-NGANGA（演奏者③）シャパンボ氏は，呪術師である。

ここでは，チョクウェの少年にとって，いかに割礼儀礼が重要であることがうかがえる。

7）植民地時代の追憶

CUMBONGE TXICHICUIAKO（演奏者①）植民地時代に役所に行かなかったので，役人にたたかれた話し。

YIBALI CATUONGA ANGOLA HOLUMUCA（演奏者②）時は，過ぎてしまった。ここは，ポルトガルの植民地であったが，今は独立してアンゴラになっている。

N'GUNZA WA LONZA INDELE（演奏者④）N'GUNZA氏が，白人と闘っている。

以上のように1）～7）までの事例から，チョクウェの「親指ピアノ」の曲の歌詞のなかでは，5）出来事に関係する歌詞が最も頻度が高いことが明らかになった。また，歌詞の内容は，チョクウェの生活世界のいくつかの断面，つまり経済生活，社会生活，精神生活のいずれかをよく反映したものになっていた。

（3）生活のなかで「親指ピアノ」

まず，この楽器は，余暇のときの楽しみに使われる。この楽器は，素材の入手が容易で，携帯に便利であることから，隣り村に訪問するなど移動の際に用いられたという。

例えば，ロシモ村の人は，約45㎞離れたサンジミ村より移住してきた人々である。彼らもまた，この音楽を娯楽のために聞いていた。元の村では，“ムエンバ”，“カコロンドンド”，“リケンベ”の演奏者がそれぞれ一人いたという。

1960年代のチョクエの社会では，“ムカンダ”と呼ばれる男性の割礼儀礼の際に，タイコとともに「親指ピアノ」（“リケンベ”）の演奏が不可欠であったという。これには，現在の使用が一般的な“リケンベ”ではなくて，ひょうたんからなる共鳴具のついた“カコロンドンド”が使われていた。これは，ドュンド博物館で収蔵されている1960年代に撮影された写真にも示されている。しかし，1990年以降現在まで，カマフィカ村やマプロ村ではタイコのみが演奏されるようになっている。これは，チョクウェの音文化のなかで「親指ピアノ」の役割が小さくなってきたことを示している。

これらから，現在の北ルンダ州のドュンド近郊では，「親指ピアノ」の音楽が衰退している現状が認められる。

4．まとめと考察

本稿では，アンゴラ北東部のチョクウェ社会での現地調査をとおして，彼らの音楽的伝統の中核を占めていた「親指ピアノ」の音文化と人々の生活とのかかわりあいを把握した。その結果，以下のような点が明らかになった。

（1）楽器の形態分類と伝播ルートの推定

従来の報告では，チョクウェの使う「親指ピアノ」は4－5種類あるといわれる。筆者は，各々に名称を持つ8種類の「親指ピアノ」の存在を確認した。おそらくアフリカの諸民族のなかで最大数のタイプを持つものであろう。このなかでも，“ムエンバ”は，最も古いタイプであるといわれ，60年代にも，製作されていなかったという。また“サッソ”は，ルンダの人々からチョクウェに伝わったという。(Diamang，1967: 38)

これらの結果から，アフリカ全体の「親指ピアノ」の分布を考慮して，これらの形成について推定する。図4は，「親指ピアノ」の伝播ルートとチョクウェのそれとの関係を説明するための仮説を示している。すでにクービックは，アフリカの「親指ピアノ」は，ジンバブエからモザンビークの海岸にかけての地域とナイジェリア東部からカメルーン南部にかけてのラフィア地域の2つを起源地として想定している（Kubik，1998)。また，両者の地域がアンゴラ東部からザンビアにかけて重なっていることを指摘している（Kubik，1998)。これに対して，筆者はアフリカの「親指ピアノ」には，上述の2つにリケンベ地域を加えて3つの起源地があると推定している。そして，チョクウェのそれでは，最も古いものとされる“ムエンバ”の伝播ルートは推定できないが，“キサンジチャケレ”はラフィア地域，“サッソ”はジンバブエから，“リケンベ”はコンゴからと，それら3つの中心地からの影響を受けて，現在確認できるような“親指ピアノ”の多様性が形成されたものであると考えている。

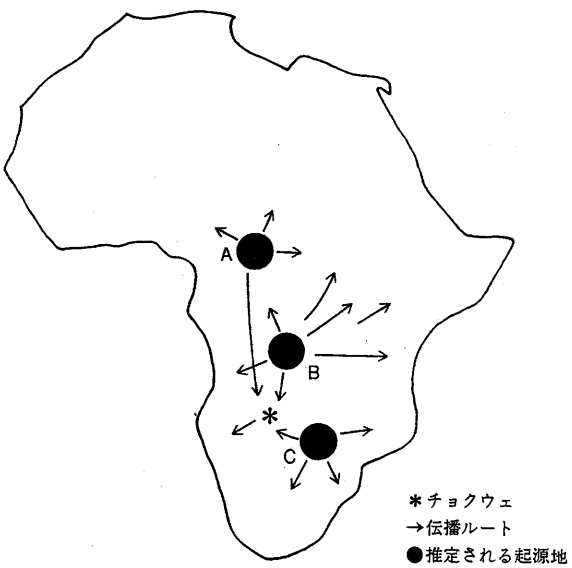

図4　アフリカの「親指ピアノ」の伝播ルートとチョクウェ
出所：筆者作成

（2）歌詞に刻まれる生活世界

筆者の現地調査によって収集した43曲の「親指ピアノ」の演奏は，男性によって単独で演奏されるのもので，すべてに歌詞がついていた。また，このうち31曲の歌詞の内容を分析すると，狩猟などの経済生活，男女関係や親子関係，キャッサバをうすでついているのは誰かのような日常生活，この鳥やネズミは食べられないという教え，男が妻子を残して旅に出て突然に帰ってきたことや男はハチに殺されたという出来事，割礼儀礼，ポルトガルの役人のふるう暴力という植民地時代の歴史などに分類される。しかし，過去25年にわたるアンゴラ内戦に関わる歌詞をもつ曲は見つからなかった。これは，調査地の人々がUNITAの影響を受けたのが1998年頃と新しいためであると考えられる。

（3）生活のなかでの「親指ピアノ」の役割の変化

「親指ピアノ」は，一般に，娯楽，儀礼，現金獲得のためのいずれかで演奏されるのが普通である。本稿では，前二者を確認したが，チョクウェ社会では演奏することを職業とする人は生まれていない。本稿では，これらの役割のほかに，3章（2）で詳述したように「当時の生活世界が反映された個人史の伝承」というものを挙げたい。これは，歌詞のなかに登場していた様々な出来事が次の世代に伝承されていくことを示している。

また，1960年代の報告と現在のものとを比較することで，チョクウェの音文化の変化を考察する。当時，「親指ピアノ」は，夜にたき火の周りで演奏されるのが普通であった。そこでは，1日の出来事などが話されたという。(Diamang，1967: 30) また，この楽器は運搬に容易であるので，人々はひとりで遠い場所を訪問するときには，必ず持参したという。これらから，この楽器の娯楽として役割がうかがえる。

しかし，現在，内戦下にあるチョクウェの人々は，政治経済の諸変化のなかで，大きな文化変容を経験してきた。「親指ピアノ」は，娯楽としては残っているものの儀礼では用いられなくなった。また，演奏者が死亡して，演奏内容を伝承する人も少なくなっている。これらは，この地域の政治経済の変容を反映していると思われるが，詳細な関係は不明である。

以上，チョクウェの「親指ピアノ」は，8種類のものが存在すること，当時の生活世界が反映しておる歌詞が発達していること，近年の政治経済変動によって急激にその使用が衰退していることが特徴であると結論づけられる。

付記

本研究の基になった現地調査は，文部科学省・基盤研究A（『アフリカ音文化における伝統の形成と変容：その社会的要因の研究』代表，川田順造教授）による。また，本稿は，第38回日本アフリカ学会（名古屋大学）での研究発表したものに加筆修正を加えたものである。

アンゴラでの現地調査では，多数のチョクウェの人々のほかに，ルアンダの国立人類学博物館（Museu Nacional de Antropologia）の館長Americo Kwononoka氏，北ルンダ州のドュンド博物館（Museu do Dundo）やリスボンの国立民族学博物館（Museu Nacional de Ethnologia）の皆様には，たいへん御世話になった。以上の方々に，厚くお礼申し上げます。

注

1) アンゴラのダイアモンド会社での過去の収蔵品，写真，研究論文などは，（Museu Antropologico da Universidade de Coimbra 1995）に詳しい。このなかでチョクウェの「親指ピアノ」が5点含まれている。
2) この地域の物価は，大部分のものが空輸のために高い。例えば，1リットルのディーゼル・オイルは60クワンザ（約360円）でルアンダのそれの約30倍もする。また，コカコーラやビールの価格は，ルアンダの約2倍の30クワンザ（約180円）である。
3) サンジミ村では，2名の「親指ピアノ」の演奏者が暮らしていたが，最近死亡したという。
4) 2001年1月30日，調査地の近郊で，追いはぎによる攻撃によってミニバスが襲われ，4人が殺される事件が起きた。この事件が，UNITAによるものかは不明である。
5) チョクウェは，すばらしい猟師として，近隣の人から認知されている（Bastin，1992:40）。彼らは，通過儀礼のなかで“マヤンガ”と呼ばれるメンバーからなる狩猟組織を持っている。
6) NGULUは，チョクウェ語でブタを意味する。MUKISHI WA NGULUは，古くから使われている仮面を示す。（Bastin，1992:38）

参考文献

Bastin, M., (1961) Art decoratif Tsokwe, Lisboa; Companhia de Diamantes de Angola, 2 vol.

Bastin, M., (1992) Musical instruments, songs and dances of the Chokwe, African Music 7(2):23-44.

Barbosa A., (1989) Dicionário Cokwe-Portugues, Instituto de Antropologia, Universidate de Coimbra.

Borel, F., (1986) Les Sanza. Neuchatel:Musée D'Ethnographie.

Diamang, (1961) Folclore Musical de Angola- Ⅰ Povo Quioco Area do Lovua, Lunda., Lisboa: Serviços Culturais da Companhia de Diamantes.

Diamang, (1967) Folclore Musical de Angola- Ⅱ Povo Quioco Area do Comissiombo, Lunda. Lisboa:Serviços Cûlturais da Companhia de Diamantes.

池谷和信，（1999）「親指ピアノ」『月刊みんぱく』23(11)：10-12.

池谷和信，（2000）「アフリカの親指ピアノについて」『第37回日本アフリカ学会学術大会研究発表要旨』35.

池谷和信，（2001）「ドイツのエキスポ2000とアフリカパビリオン」『民博通信』91：69-79.

Jordan M., (2000) Revisiting Pwo, African Art, 33(4): 16-25.

Kubik, G., (1970) Musica tradicional e aculturade dos !Kung de Angola. Lisboa:Centro de Estudos de Anthropoligia Cultural. N°4.

Kubik, G., (1998) Kalimba, Nsansi, Mbira-Lamellophone in Afrika-. Berlin:Museum Fur Völkerkunde.

Museu Antropologico da Universidade de Coimbra, (1995) Diamang-Estudo do Patrimonio Cultural da Ex-Companhia de Diamantes de Angola, Coimbra, MAUC.

Oliveira, J.O., (1958) Flagrantes da Vida na Lunda, Publicacoes Culturais do Museu do Dundo, n 37.

Porto, N., (1999) Angola a Preto E Branco. Museu Anthropologico Universidate de Coimbra.

Redinha, J., (1974) Distribuiçao Étnica de Angola, Inst. De Inv. Cient. De Angola.

Redinha, J, (1984) Instrumentos Musicais de Angola. Coimbra: Universidade de Coimbra, Instituto de Antropologia.

(Summary)

The Culture and Variety of Forms of the Thumb Piano played by the Tshokwe in Northeastern Angola

Kazunobu IKEYA
National Museum of Ethnology

The thumb piano originated in Africa and is still played in various areas south of the Sahara. I am interested in clarifying the historical process in which this instrument has spread throughout the regions, and the role of music played on the instrument in people's everyday life.

This paper focuses on thumb pianos, one example of the Tshokwe sound culture, and aims to clarify the relationship between the the Tshokwe sound culture and their lives by studying the forms of thumb pianos and lyrics of thumb-piano music.

From mid-January to early in February 2001, I listered to nine thumb-piano players living in Dundo and its neighboring areas in the northeastern regions of Angola, and recorded their musical performance. I also studied artifacts preserved at the Dundo Museum, and obtained information on the variety of forms of Tshokwe thumb pianos.

The Tshokwe people mainly live the in eastern parts of Angola, and belong to the Bantu. With farming such as cassava growing as their central source of livelihood, the Tshokwe make a living by a combination of hunting, fishing, and seasonal labor.

As a result of this field study, I identified the following three facts.

(1) There are eight types of Tshokwe thumb pianos, each of which has a different name according to its form, although a previous study specified only four to five types.

(2) 43 pieces of music are songs performed solo by men, and the all have lyrics. I studied the lyrics of 31 songs, and classified them the following themes: economic life, such as hunting; the relationship between a child and parent or between the sexes; everyday life, such as asking who is pounding cassava in a mortar; teachings such as which birds and mice are inedible; the incident of a man who left his family to travel and suddenly came home, or of a man killed by bees; circumcision rituals; and the history of the colonial era, including the violent acts of Portuguese officials. None of the collected songs, however, refer to the Angolan civil war, which lasted for 25 years. I suppose this is because the people studied experienced the war around 1998, which is relatively recently.

(3) The thumb piano is usually played for recreation, rituals, and making money. I found instances of recreation and rituals, but no one in Tshokwe society plays it as an occupation. Playing the thumb piano also has another role, other than the above, of handing down the Tshokwe people's personal history, reflecting their lives and surroundings, because incidents described in the lyrics are passed down from generation to generation. By comparing a report in the 1960s with this one, it is also clear that the thumb piano is no longer used in rituals although it is used for recreation. There are now fewer people to pass down the lyrics than in the past as some of the thumb piano players have died.

This study showed that the music is performed by thumb piano has a variety of forms and that the role of this music in people's lives is declining, unlike in the past when it was closely related to everyday life.